

古地図からみた明治32年の 西山油田の石油鉱区分布

品 田 光 春

1. はじめに

明治期以降、地形図をはじめとする官製地図が整備されていく一方で、様々な民間地図¹も作成された。近代期を対象とした歴史地理学的研究において、民間地図が資料として重視され、これらを用いた研究成果も多く蓄積されつつある。筆者が専攻する歴史地理学的な鉱業地理研究においても、失われた鉱業景観の復原や、鉱区の地理的分布およびその所有関係を可視的に把握する上で、民間発行の鉱業関係地図は、地形図や地質図といった官製地図や、鉱業権申請者が申請時に国に提出した鉱区図²といった公的な地図と同様に有効な資料である。これまで筆者も、油田関連の民間地図を用いて、油田景観の復原や油田開発の実態について考察してきた³。

採取産業である鉱業は、地下に埋蔵されている鉱物を採取することにより成立する。鉱物の所有は、実際には鉱区の所有を媒介して行われる。鉱区とは、鉱業権の登録を得た一定の区域である。そして、所有する鉱区の良し悪しによって、鉱業生産力が規定される。また鉱業資本の拡大再生産にとって、鉱区所有の拡大や鉱区占有の集中による投資対象の確保は、資本自体の集積・再投資とともに、極めて重要な意義を有する。それゆえ、歴史地理学的な鉱業地理研究鉱業地理学にとっても、鉱区の地理的分布や所有関係およびその歴史的変遷に関する事実関係の把握は、最も基礎的かつ重要な作業として位置付けられ

る。

すでに1950年代に尾原⁴は、鉱業地理研究において鉱業権に着目する必要性を指摘していた。しかし、矢田俊文による戦後日本の石炭産業の合理化に関する経済地理学的研究⁵など、優れた研究成果も得られたものの、近代を対象とした歴史地理学的な鉱業地理研究においては、鉱業権・鉱区所有関係の問題を中心に考察した事例は極めて少ない。その理由として、歴史地理学の場合、過去の鉱業権者を対象とする必要があるが、それら鉱区関係の資料入手の困難さ⁶と、鉱業地理学の研究の関心が、主として鉱業自体の空間的諸問題よりも、鉱業活動に伴って形成される各種鉱山集落や鉱業地域社会にあった点が考えられる。

本稿で扱う石油業においても、原油生産を規定する鉱区とその所有関係の実態把握は重要な作業であることは言うまでもない。このような認識から筆者は、石油鉱区の分布・所有に関する研究を蓄積してきた⁷。特に、鉱区の形状や地理的分布を把握する上で地図資料は不可欠である。官製地形図では油井の大まかな分布は確認できるが、各鉱区の境界線は確認できない。また、鉱区図では個別の鉱区の形状や隣接する鉱区については確認できるが、油田全体など広域の鉱区設定状況を把握することはできない。さらに資料の残存状況からしても、広域の現存しない全鉱業権者の鉱区図を収集することは、きわめて困難である。その点、地域の鉱業の現状を広く紹介するために作成された、鉱区分布が記載された民間地図は、広域の鉱区所有の全体像を把握できる貴重な資料であろう。そこで、本稿では、新潟県刈羽郡の西山油田のほぼ全域を描いた民間発行の地図である、1899（明治32）年に発行された『刈羽郡石油坑区地図其一』（図1）（以下、『坑区地図』と略称）を用いて、同図の記載内容を検証しつつ、刈羽郡を中心とした西山油田の石油鉱区の分布とその所有状況から、当時の西山油田開発の動向の特徴について考察する。

『坑区地図』は、大塚専一の調査により1904（明治37）年に農商務省地質調査所が発行した『大日本帝国油田第三区地質及地形図』⁸よりも古く、筆者の知る限り、主題図として西山油田を描いた最初期の民間地図である。西山油田に



図1 『刈羽郡石油坑区地図其一』全体（縮小）

注 原寸：縦39cm横53cm 4色刷り，筆者所蔵。

において産油量が急増した最初のピークは1901（明治34）年（92,180kl）なので、『坑区地図』では，その直前の開発初期の西山油田の鉱区分布を把握できる。

2. 『刈羽郡石油坑区地図其一』について

『坑区地図』は，縦39cm横53cmの4色の彩色図である。1899年12月24日印刷，同28日発行，編集兼発行人は，刈羽郡比角村の金子兵二郎で，金子書籍店の発行である。定価は記載されていないが，市販されていた可能性もある。図郭内右中央には，この図の発行の経緯について，編者自身が以下のように記している。

「刈羽郡石油坑区地図ハ編者自ラ郡内ヲ闊歩視察シテ記録セル者ヲ基礎トシテ当業者ニ質シ勉メテ精確ヲ主トセシモ該業ノ變動時々ニ起リ実想容易ニ端倪ス可ラズ且ツ新ニ坑区ヲ出願シタルモノ、如キ或ハ本図ニ刷録セザルモ固ト是レ編ヲ重子版ヲ追フモノナルガ故ニ今回ハ僅カニ其ノ一部ヲ調査セシモノヲ出版セシモノニシテ隔靴ノ憾ニ堪ヘザルモ爾来改正増補シテ完全ナル全幅ノ地図トナシ諸君ノ便ニ反カサランヲ期ス幸ニ之ヲ諒セヨ」

つまり、この図は編者が自ら現地視察して得た記録を基に応急版として作成したものであるが、新規に出願した鉱区の採録漏れの不備もあるので、将来的に完全な改正増補版を出版したい、とのことである。図のタイトルに「其一」とあるが、その後「其二」あるいは改訂増補版が発行されたのか、現時点では確認できていない。

図のタイトルには「刈羽郡」とあるが、実際には刈羽・三島両郡の広義の西山油田のほぼ全域が収録されている。広義の西山油田とは、一般に新潟県中越地方の長岡を基準に東側に位置する東山油田に対して、西側に位置する油田の総称である。さらに背斜軸の油帯に沿って、いくつかの地区に区分される。『西山町誌』⁹によれば、西山油田は通常5～7列の油帯から構成されている。すなわち、「尼瀬石地油帯」・「宮川後谷油帯」・「長嶺鎌田油帯」・「中央油帯」・「高町油帯」の5油帯に分類され、さらに「尼瀬石地油帯」を「尼瀬油帯」と「石地油帯」に、「長嶺鎌田油帯」の北部を「別山油帯」に細分する場合もある。中でもJR越後線の西側、西山駅から礼拝駅附近にかけて連なる長嶺鎌田油帯は最も多くの機械掘による油井が掘削され、明治・大正期の原油生産の中核を成した油田であった。この長嶺鎌田油帯が狭義の西山油田に相当する。『坑区地図』の編者の金子は、刈羽郡に隣接する尼瀬油田を広義の西山油田の一部として認識しなかったのか、この図には尼瀬油田の部分は描かれていない。

西山油田における石油産業の歴史は古く、中央油帯に位置する旧西山町大字妙法寺字草生水谷は、『日本書紀』に登場する「燃土・燃水」の献土地の候補として比定されている。江戸時代には、西山油田の刈羽郡内では妙法寺村や油

田村において、灯火用として原油の採取や手堀採掘が行われていた。また同郡の半田村では1853（嘉永5）年に、日本初のランビキ法による製油所が操業されたという。

明治期に入ると、石油業はしだいに企業的な近代産業として成長し、刈羽郡においても1888（明治21）年には尼瀬油田に隣接する石地村で、地元の内藤久寛・山口権三郎などの地主や商人を中心に公称資本金10万円（後に15万円に改正）の日本石油が設立された。これは、当時日本最大の石油会社であった。

明治30年代には西山油田内の尼瀬油田が衰退する一方で、新しく開発された長嶺鎌田油帯と宮川後谷油帯へ生産の中心が移行する。さらに、1898（明治31）年の北越鉄道の全通により柏崎地区が陸・海の結節地として交通の便が良くなったことなどの理由から、日本石油第2製油所をはじめとする大小多くの製油所や石油会社の本社が柏崎地区に立地した。日本石油も1899～1914（大正3）年まで柏崎に本社を置いた。大正期以降も西山油田は国内の主力油田であり続け、現在も地下深層部のグリーンタフからの天然ガスの生産が行われている。

『坑区地図』の凡例（「符号」）には、「川」、「郡界」、「道路（国県、町村）」、「町」、「駅」、「村」、「山」、「田及宅地」、「試掘区域線」、「橋梁」が区分されている。「試掘区域線」によって各鉱区の分布と形状が把握できる点がこの図の最大の特徴で、各鉱区に鉱業権者と思われる個人名や会社名が記載されている。凡例には「試掘」と表記されているが、各鉱区には「試掘地」あるいは「試掘」という表記以外にも、「特許地」あるいは「特許」と記載された鉱区もあるので、実際には採掘鉱区を含む全鉱区が記載されている。しかし、鉱業権者名しか記載されていない鉱区や、ただ「争願地」と記されるだけで、所有者が不明あるいは未確定の鉱区も散見される。各鉱区の登録番号は、記載されていない。また、地図の縮尺が不明なので、図上では正確な面積が計測できないが、各鉱区の配置や大小、さらに直線で区画された形状はおおまかに把握できる。図の作成過程で参照された資料は明らかにされていないが、おそらく各鉱業権者の鉱区図等を用いたのではないだろうか。また、凡例には記されていないが、油井らしき記号（「井」）が描かれている鉱区がある。このような鉱区では、単

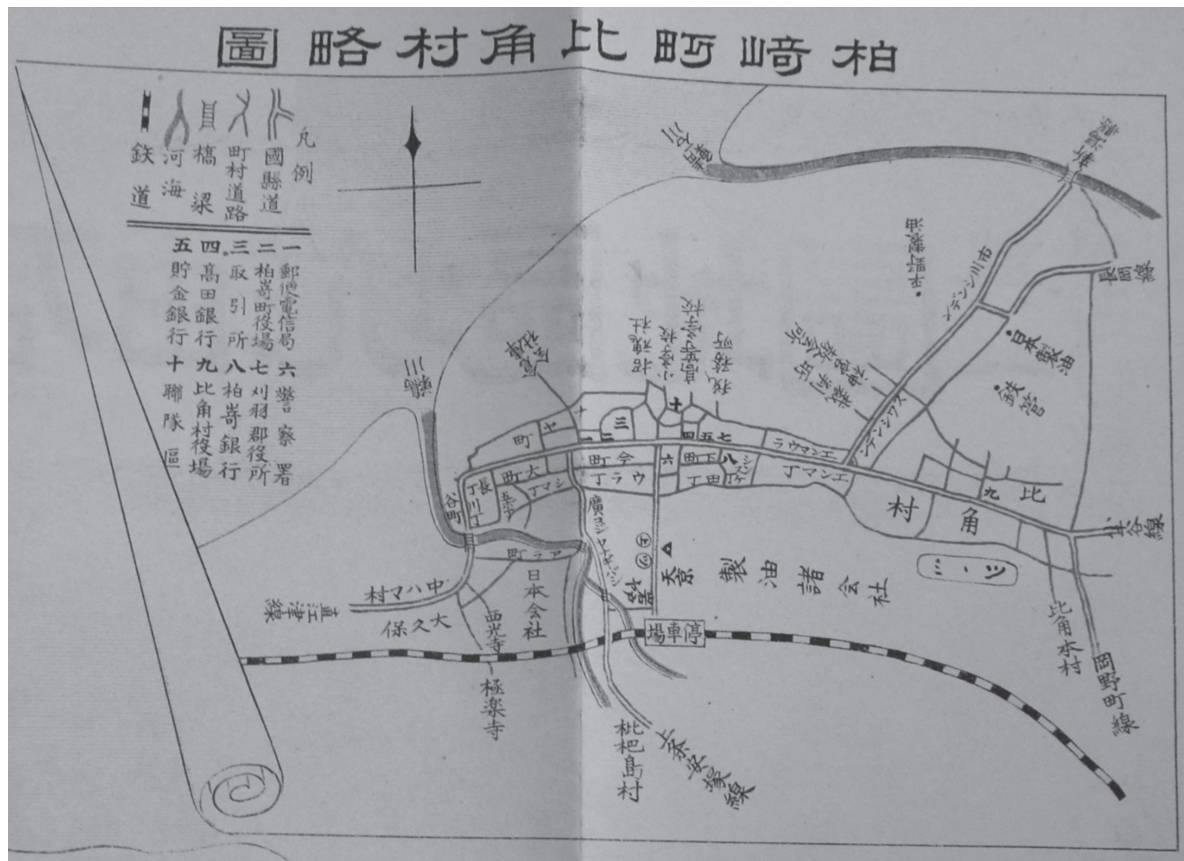


図2 『刈羽郡石油坑区地図其一』「柏崎町比角村略図」部分（縮小）

注 原寸：縦39cm横53cm 4色刷り，筆者所蔵。

なる鉱区取得だけではなく，実際に原油生産が行われていた可能性が高い。

また、『坑区地図』の図郭内右上には，「柏崎町比角村略図」（図2）が収録されている。この付図も縮尺不明の簡略な図であるが，西山油田の原油を精製する多くの製油所が立地した柏崎駅付近の様子が描かれている。「日本会社」（日本石油），「日本製油」，「平野製油」といった個別の製油所が記載されているが，その他多くの小規模製油所は「製油諸会社」と一括されている。この付図は，西山油田の隆盛により「オイルシティー」化しつつあった柏崎の様子が描かれた貴重な都市地図でもある。

3. 明治32年における西山油田の石油鉱区分布と鉱業権者

図3は、『坑区地図』の中で、「試掘区域線」で鉱区が描かれている範囲を抽出したものである。図中の各鉱区に付された番号は、筆者が任意に加筆したものである。表1は図3で番号を付した各鉱区の鉱業権者名と、図上の記載事項の一覧表である。図上で「試掘区域線」で区分された一区画を1鉱区とみなして集計した結果、図中の西山油田のほぼ全域を何らかの鉱区が設定されており、全体で90鉱区が確認された。ただし、鉱区番号26では、石坂周造の試掘地、外山太吉外四人の試掘地、山岸直次郎の出願地が図上では1鉱区として描かれているが、おそらく試掘権を得た「試掘地」と、出願中と思われる「出願地」が混在しており、図上で確認できる鉱区の大きさや、いびつな形状からして、本来はそれぞれ別の3鉱区の可能性がある。石坂（周造か？）の特許地、日本会社（日本石油）、鉱業権者不明の争願地が図上では同一鉱区として描かれている鉱区番号29も同様である。しかし、現時点ではこれらの鉱区についての詳細が確認できないので、ここでは図上での区分を優先して、それぞれ1鉱区と見なす。その他、1鉱区に複数の鉱業権者名が記載されている鉱区は、共同で出願した単一鉱区と判断した。

全90鉱区の中で、具体的な坑場名が記載されているのは、日本石油宮川坑場（鉱区番号1）、蔵王石油・太平石油勝山坑場（鉱区番号19）、日宝石油後谷坑場（鉱区番号43）、蔵王石油中川出張所（鉱区番号55）、蔵王石油七日市坑場（鉱区番号78）、米山石油後谷坑場（鉱区番号79）、蔵王石油上岩井坑場（鉱区番号90）の7鉱区で、大手の日本石油や蔵王石油をはじめとする石油会社の所有鉱区である。特許地は、採掘特許を得た採掘鉱区である。この図が作成された1899年の時点で実際に原油生産が行われていたか定かではないが、少なくとも一度は生産が行われたことがある鉱区である。鉱区番号7、18、23、24、29、34、40、63、70の9鉱区で、日本石油・宝田石油のような大石油会社のほか個人所有の鉱区もある。図中の油井らしき記号は、鉱区番号1（6井）、3（2井）、28（3井）、29（2井）、39（11井）、40（2井）、41（4井）、43（2井）、55（5井）、56

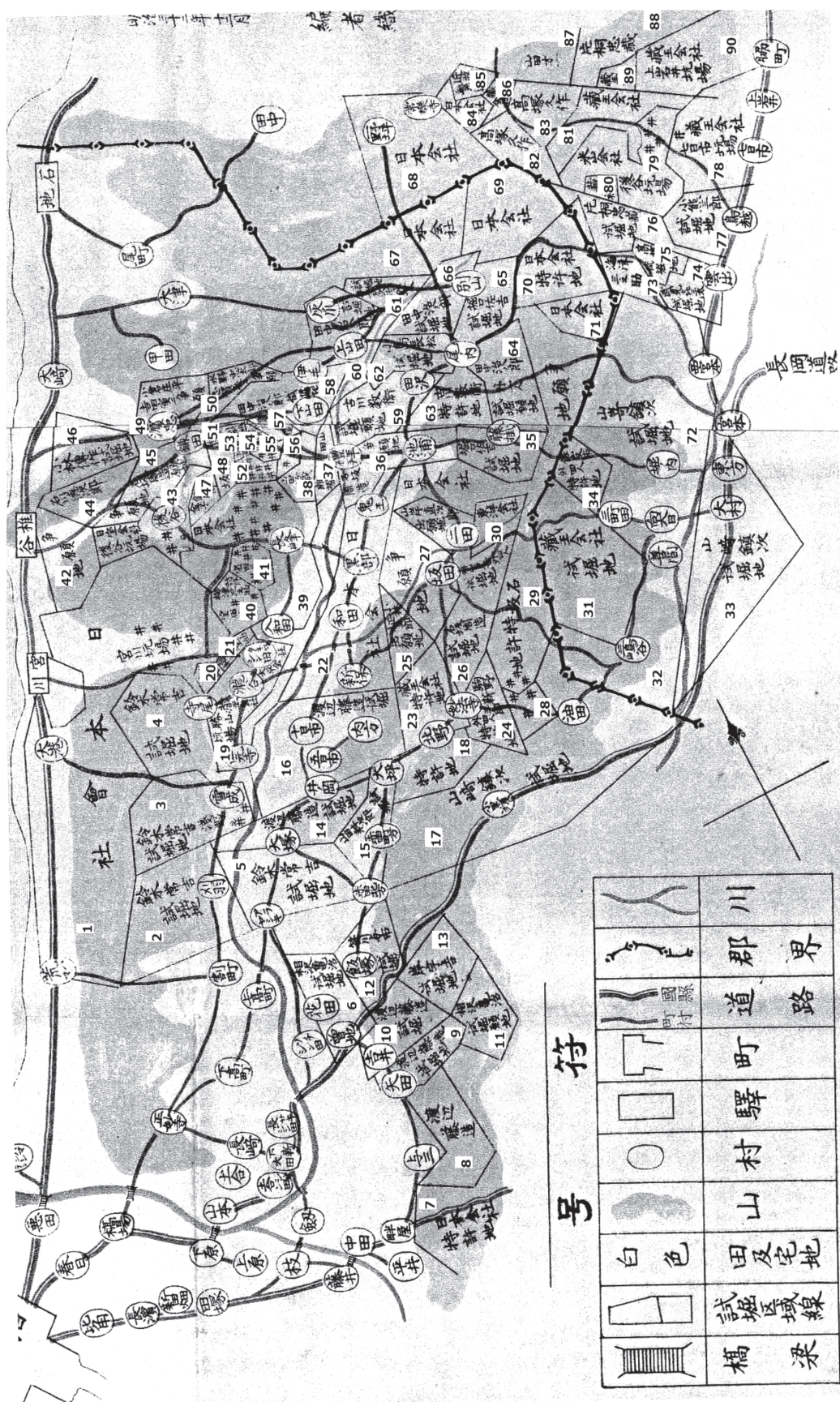


図3 『刈羽郡石油坑区地図其一』 西山油田 (刈羽郡・三島郡) 部分 (縮小)

注 鉦区番号は筆者が任意に設定・加筆 (表1と対応)。

表 1 刈羽郡石油鉱区一覧（明治32年）

| 鉱区番号 | 鉱業権者名 | その他記載内容 | 鉱区番号 | 鉱業権者名 | その他記載内容 | 鉱区番号 | 鉱業権者名 | その他記載内容 |
|------|-----------|-----------|------|------------|----------|------|----------|---------|
| 1 | 日本会社 | 宮川坑場 | 30 | 東洋会社 | 試掘地 | 63 | 古川数衛 | 特許地 |
| 2 | 鈴木常吉 | 試掘地 | 31 | 蔵王会社 | 油井 2 | 64 | 田中治八郎外一人 | 試掘願地 |
| 3 | 鈴木常吉、浅野 | 試掘地 | 32 | 山崎鎮次 | 油井 2 | 65 | 堀口佐吉 | 試掘地 |
| 4 | 鈴木常吉 | 試掘地 | 33 | 山崎鎮次 | 試掘地 | 66 | 田中治八郎 | 試掘地 |
| 5 | 鈴木常吉 | 試掘地 | 34 | 佐山又市外四人 | 特許地 | 67 | 日本会社 | |
| 6 | 鈴木常吉 | 試掘地 | 35 | 堀口佐吉 | 試掘地 | 68 | 日本会社 | |
| 7 | 相沢亀治 | 特許地 | 36 | 石坂周造 | 争願地 | 69 | 日本会社 | |
| 8 | 渡辺藤造 | 試掘地 | 37 | 山田耕次郎 | 試掘 | 70 | 日本会社 | 特許地 |
| 9 | 渡辺藤造 | 試掘地 | 38 | 山田竹藏 | | 71 | 日本会社 | |
| 10 | 渡辺藤造 | 試掘 | 39 | 日本会社 | 油井11 | 72 | 山崎鎮次 | 試掘地 |
| 11 | 相沢亀治 | 試掘願地 | 40 | 梅津三之助、宝田会社 | 油井 2、共同？ | 73 | 海津三之助 | |
| 12 | 笹川与一 | 試掘 | 41 | 宝田長峰組合 | 油井 4 | 74 | 武見崑三太 | 試掘地 |
| 13 | 岸宇吉 | 試掘地 | 42 | ？ | 争願地 | 75 | 高橋 | 試掘地 |
| 14 | 渡辺藤造 | 試掘地 | 43 | 日宝会社 | 後谷坑場 | 76 | 片桐忠藏 | 試掘地 |
| 15 | 山田耕次郎 | 試掘 | 44 | 石川徳次郎 | 油井 2 | 77 | 小堀三郎 | 試掘地 |
| 16 | 渡辺藤造 | 試掘 | 45 | 石坂周造 | 願地、争願地 | 78 | 蔵王会社 | |
| 17 | 山崎鎮次 | 試掘地 | 46 | 小林傳作 | 試掘地 | 79 | 米山会社 | 油井 1 |
| 18 | ？ | 特許地 | 47 | 金子鉄次郎 | | 80 | 蔵王会社 | 後谷坑場 |
| 19 | 蔵王会社、太平会社 | 勝山坑場 | 48 | 石坂 | | 81 | 蔵王会社 | |
| 20 | 山岸直二良 | 共同？ | 49 | 小倉庄平、吉田寅二 | 争願 | 82 | 高塚久作 | |
| 21 | 梅津三之助 | | 50 | 水野忠太郎、志賀辰二 | 争願 | 83 | 高塚久作 | |
| 22 | 日本会社 | | 51 | 斉藤和乎太、刈羽組 | | 84 | 日本会社 | |
| 23 | 蔵王会社 | 特許地 | 52 | 矢島 | 油井 7 | 85 | 近藤繁造 | |
| 24 | 駒野新三郎外四人 | 特許地 | 53 | 小坂 | | 86 | 蔵王会社 | |
| 25 | 小林権五郎 | 出願地 | 54 | 山岸 | | 87 | 山田才一 | |
| 26 | 石坂周造 | 試掘地 | 55 | 蔵王 | 中川出張 | 88 | 片桐忠藏 | 上岩井坑場 |
| 27 | 外山太吉外四人 | 境界不明 | 56 | 明治 | 油井11 | 89 | 蔵王会社 | |
| 28 | 山岸直次郎 | 出願地 | 57 | 渡辺藤造 | | 90 | 蔵王会社 | |
| 29 | ？ | 争願地 | 58 | 田中治八郎 | 試掘地 | | | |
| | ？ | 油井 3 | 59 | 古川数衛 | 試掘願地 | | | |
| | 石坂 | 特許地 | 60 | 田中治八郎 | 試掘地 | | | |
| | 日本会社 | 油井 2、境界不明 | 61 | 井上戸久治外一人 | 試掘地 | | | |
| | ？ | 争願地 | 62 | 小島長松 | 試掘地 | | | |

資料：『刈羽郡石油坑区地図 其一』

注）鉱区番号は筆者が任意に設定した（図 3 に対応）。

鉱業権者名の「？」は記載なし。「油井」は図中に記載された油井記号の数。

(11井), 78 (1井), 79 (4井) の計12鉱区に53井が記載されている。特に日本石油 (鉱区番号39) と明治石油 (鉱区番号56) は, 1 鉱区内に11の油井が記載されている。これらの油井は, 必ずしも先に見た坑場名や特許地の記載がある鉱区の分布とは一致しない。図にあえて油井を書き込んでいることからすると, これらの多くは出油井である可能性が高い。したがって, 坑場名や特許地の記載がなく, また特に試掘地と明記されていない油井が表記された鉱区番号28, 39, 41, 56は採掘鉱区と見なすことにする。これら4 鉱区に, 先の坑場名や特許地の記載がある16鉱区を合わせた計20鉱区が, 西山油田の採掘鉱区の総数であるとする, 全90鉱区の約22.2%に過ぎない。つまり, 1899年時点で実際に原油生産が行われていた鉱区は全体の2割程度しかなかったということである。しかもその分布は, 明治30年代以降西山油田の原油生産の主力をなす宮川後谷油帯と長嶺鎌田油帯 (図3上部), さらに近代以前から開発が進んだ山間部の中央油帯 (図3下部の刈羽・三島両群の郡界付近) に集中している。

なお, 試掘地等の表記が一切ない鉱区 (鉱区番号8, 20, 21, 22, 30, 38, 44, 47, 48, 51, 53, 54, 57, 67, 68, 69, 71, 73, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 89) は, 採掘鉱区である可能性も否定できないが, これら28鉱区を採掘鉱区に含めると, 先の20鉱区と合わせて48鉱区, 全体の約53.3%にもなり, 当時の西山油田の開発段階から見ても, やや多すぎる。また, これら表記のない鉱区は, 編者の金子が未調査の鉱区の可能性も考えられるので, 現時点では採掘鉱区として確定することはできない。

「試掘 (地)」あるいは「試掘願地」と明記された33鉱区 (鉱区番号2, 3, 4, 5, 6, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 26, 31, 32, 33, 35, 37, 46, 58, 59, 60, 61, 62, 64, 66, 72, 74, 75, 76, 77) は, 期間限定の試掘鉱区であろう。鈴木常吉と浅野 (総一郎?) が所有する試掘鉱区 (鉱区番号3) 以外の試掘鉱区には油井が描かれていないので, これらの鉱区で実際に試掘井の掘削などの採鉱活動が行われていたのかは不明である。

図上の鉱区の設定状況を見ると, 経験的に出油が期待できる主要油帯沿いでは, 開発初期のこの時点で, すでに新規に鉱区を設定する余地はほとんど残っ

ておらず、既存の鉱区の買収以外に鉱区を新規獲得あるいは拡大することは困難だったに違いない。鉱業権は先願主義に基づく独占的・排他的な権利なので、当初から自力での開発を行わず、転売目的で取得した鉱区も多かったのではないだろうか。実際に複数の「争願地」（鉱区番号27, 29, 36, 42, 46, 49, 50）があり、鉱区獲得競争が激化しつつあった様子がわかる。

複数鉱区を所有している鉱業権者（共同所有も含む）の中で、日本石油（鉱区番号1, 7, 22, 29, 39, 67, 68, 69, 70, 71, 84, 計11鉱区）、蔵王石油（鉱区番号19, 23, 31, 55, 78, 80, 81, 86, 89, 90, 計10鉱区）が突出して多い。

『坑区地図』が作成された1899年は、日本最大の石油会社である日本石油は、衰退しつつあった尼瀬油田に代わって刈羽郡内の西山油田に開発の中心をシフトさせ、本社を尼瀬から柏崎に移転して会社の経営規模も拡大し、原油生産を増加させつつあった時期である。日本石油が原油生産の中核として、西山油田で活発な鉱業活動を展開していた様子が、同社の鉱区所有の多さに反映されている。特に長嶺鎌田油帯と宮川後谷油帯に優良鉱区を所有していた。

日本石油に次ぐ鉱区を所有していた蔵王石油は、1894（明治27）年に三島徳三らによって、長岡にて資本金7万5000円で設立された。1902（明治35）年にアメリカ資本のインターナショナル石油に買収されるまでは、日本石油や宝田石油に次ぐ規模の石油会社であった。特に長嶺鎌田油帯の鎌田油田に優良鉱区を所有していた。

日本石油の次ぐ規模の石油会社である長岡の宝田石油は、東山油田が生産の主力で西山油田には後発的な参入であった。宝田石油は、後に中小石油会社や組合の大合併を経て日本石油を同程度の大石油会社に成長するが、1899年の時点では、西山油田にはわずか2鉱区（鉱区番号40, 41）を有するのみである。

個人鉱業家（共同所有含む）でも、複数の鉱区を所有している者も複数確認できる。鈴木常吉（鉱区番号2, 3, 4, 5）、渡辺藤造（鉱区番号8, 9, 10, 14, 16, 57）、石坂（周造）（鉱区番号26, 29, 36, 45, 48）が目立つ。これらは全て試掘鉱区または争願地である。

静岡県相良出身の石坂周造は、明治初期から油田開発に積極的に参画し、

1871（明治4）年に長野石炭油会社を設立し、長野県や静岡県で石油事業を展開した。彼は、1872（明治5）年に尼瀬油田で綱式削井機を用いて機械掘を試みるが、雇用した外国人技師の技術的な未熟もあり、失敗した。その後も彼は西山油田の開発に積極的に関与し続ける。鎌田油田の本格的な開発は1899年の石坂周造の鎌田3号井における大噴油（鉦区番号48か?）によって始まったが、その後、石坂が門戸解放を唱えて自己所有鉦区の一部を蔵王石油、五菱組などに割譲し、残る部分において希望者の共同削井を許したため、鎌田油田における中小石油会社・組合の急増を招くことになる。

多くの鉦業権者によって細分化された鉦区所有は、油田の場合は鉦区境での競争的な油井掘削による無計画な乱開発を招く危険性がある。『坑区地図』で見ると、西山油田の主要油帯ではほぼ全域に鉦区が複雑に入り組んで設定されており、すでに開発初期段階において乱開発が広範囲で引き起こされる可能性があったことがわかる。

なお、『坑区地図』では、大正末期から昭和初期に開発される高町油帯（図3左上、「上高町」、「下高町」、「割町」付近）には、まだ鉦区が設定されていない。当時の石油鉦業者にとってこれらの地域は、まだ出油の可能性のある西山油田の一部とは認識されていなかったようである¹⁰。

4. おわりに

本稿では、新潟県刈羽郡の西山油田のほぼ全域を描いた最初期の民間発行の地図である『坑区地図』を用いて、同図の記載内容を検証しつつ、刈羽郡を中心とした西山油田の石油鉦区の分布とその所有状況から、当時の西山油田開発の動向の特徴について考察した。本稿で得られた知見は、以下の点である。

『坑区地図』は、1899年に編者の金子兵二郎が自ら現地視察して得た記録を基に応急版として作成した地図であり、尼瀬石地油帯を除く刈羽・三島両郡の広義の西山油田のほぼ全域が収録されていた。記載内容が不明瞭な点が散見されるが、「試掘区域線」によって各鉦区の分布と形状、さらに各鉦区に鉦業権

者と思われる個人名や会社名や油井が記載されている点が、この図の最大の特徴である。

『坑区地図』に記載されている全90鉱区の内、20鉱区で原油生産が行われた採掘鉱区の可能性が高く、これは全体の2割程度であった。しかもその分布は、明治30年代以降西山油田の原油生産の主力をなす宮川後谷油帯と長嶺鎌田油帯、古くから開発が進んだ山間部の中央油帯に集中していた。大石油会社である日本石油と蔵王石油が多くの鉱区を所有していたが、石坂周造のような個人の鉱業権者でも複数鉱区を出願・所有し、積極的に油田開発に参入する者もいた。

経験的に出油が期待できる主要油帯沿いでは、開発初期の1899年の時点で、すでに新規に鉱区を設定する余地は、未開発の高町油帯を除くとほとんど残っていなかった。したがって、遅れて開発に参入する鉱業者は、既存の鉱区の買収以外に、鉱区を新規に獲得あるいは拡大することは困難な状況であった。また、ほぼ全域に鉱区が複雑に入り組んで設定された西山油田では、すでに開発初期段階において乱開発が広範囲で引き起こされる可能性があった。

今回取り上げた『坑区地図』は、明治30年代前半の西山油田の開発が急速に進展しつつある時期において、各鉱業権者の鉱区分布の全体像を可視化して把握できる、現時点では唯一の貴重な地図資料である。しかし、公的地図と異なり、この地図は作成方法や地図表現のルールも不明瞭である。また、この図が作成された経緯や、当時実際どのように活用されていたのかなど、不明な点は多い。これらについては、今後のさらなる資料調査で明らかにしていきたい。

本小論を、このたび日本大学法学部を退職される小倉眞先生に謹呈するとともに、ますますのご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

文献

- 尾原信彦「地理学の研究対象としての鉱業並びにその研究方法について」、社会地理、1950年、29巻10号、2－5頁。
- 品田光春「採掘鉱区の推移からみた明治中期の新潟県における油田開発」、地理誌叢、40巻2号、1999年a、65－76頁。

- 品田光春「企業勃興期の新潟県における石油会社の立地と鉱区所有からみた地域間関係」, 季刊地理学51巻4号, 1999年b, 291-305頁.
- 品田光春「明治期における油田開発と鉱業地域形成—新潟県西山油田を事例に—」, 歴史地理学, 41巻3号, 1999年c, 1-20頁.
- 品田光春「明治前期の新潟県における油田開発—『鉱山借区一覧表』の分析を中心として—」, 東北学院大学東北文化研究所紀要, 33号, 2001年, 83-101頁.
- 品田光春「歴史地理学的資料としての鉱区図」, 地理誌叢45巻1号, 2003年, 49-58p.
- 品田光春「民間地図に描かれた油田景観—新潟県西山油田を事例に—」, 地理誌叢, 45巻2号, 2004年, 60-68頁.
- 品田光春「鉱業権者の変遷からみた新潟県の油田開発」, 山根 拓・中西僚太郎編『近代日本の地域形成 歴史地理学からのアプローチ』, 2007年, 青海社, 127-148頁.
- 品田光春「もう一つの『西山油田図』」, 高崎商科大学紀要, 23号, 2008年, 185-195頁.
- 品田光春「近代日本の石油会社発行の事業案内小冊子」, 高崎商科大学紀要, 24号, 2009年, 187-199頁.
- 品田光春「『越後石油地図』について」, 地理誌叢, 52巻1号, 2010年a, 21-26頁.
- 品田光春「古地図に描かれた明治期の新潟県北蒲原郡南部の鉱山分布」, 高崎商科大学紀要, 25号, 2010年b, 215-224頁.
- 品田光春「大正期の新設石油会社による鉱区調査—出羽石油株式会社を事例に—」, 高崎商科大学紀要, 26号, 2011年, 163-168頁.
- 品田光春「出羽石油株式会社の設立と鉱区買収」, 高崎商科大学紀要, 27号, 2012年, 127-133頁.
- 品田光春「昭和初期の高町油田に関する地図資料」, 高崎商科大学紀要, 28号, 2013年, 161-171頁.
- 品田光春「古地図に描かれた大正期の長岡市における石油産業の立地状況」, 高崎商科大学紀要, 29号, 2014年, 131-137頁.
- 品田光春「鳥瞰図に描かれた油田」, 高崎商科大学紀要, 30号, 2015年, 81-89頁.
- 品田光春「『古志郡浦瀬石油借区略図』からみた1892年の東山油田の借区所有状況」, 地理誌叢, 59巻2号, 2018年, 47-52頁.
- 品田光春「明治期の尼瀬油田開発に関する古地図」, 高崎商科大学紀要, 33号, 2018年, 161-167頁.
- 品田光春「近代日本の油田開発における海浜・海底」, 歴史地理学, 63巻1号, 2019年, 116-130頁.
- 中西僚太郎「明治～昭和初期の千葉県における民間地図の種類と記載内容の特色」, 千葉大学教育学部地理学研究報告, 12号, 2001年, 21-35頁.
- 西山町誌編纂委員会編『西山町誌』, 1963年, 西山町役場.
- 矢田俊文「合理化による石炭資源の放棄—常磐炭田の例—」, 経済地理学年報, 13巻1号, 1967年, 1-19頁.
- 矢田俊文「石狩炭田における合理化の実態」, 人文地理, 24巻, 1972年a, 268-308頁.

矢田俊文「石炭産業合理化と鉱区再編成—資本による石炭資源の取捨選択—」, 経済地理学年報, 18巻2号, 1972年b, 1-22頁.

矢田俊文『戦後日本の石炭産業』, 1975年, 新評論.

- 1 本稿では中西（2001）同様に，国や地方公共団体以外の個人や組織が発行者もしくは発行所となっている地図を民間地図とする。
- 2 鉱区図の歴史地理学的資料としての意義については，品田（2003）を参照。
- 3 品田（2004, 2008, 2009, 2010a,b,2013, 2014, 2015, 2018）。
- 4 尾原（1950）。
- 5 矢田（1967, 1972a, b）をはじめとする一連の業績は，矢田（1975）に集約されている。
- 6 矢田（1972）では，従来の石炭産業合理化分析において，「石炭資本が合理化の強行に際して，最も重視した一つである炭層＝資源の取捨選択の過程に関する分析は完全に欠落している」と指摘した上で，その理由の一つとして，「この部面での資料収集が「企業秘密」の壁にぶつかってとくに困難であること」をあげている。基本的に過去の鉱業権者を対象とし，資料的な制約の大きい歴史地理学的研究においては，このような調査はより困難であり，当該分野の研究不振の一因となっていると思われる。
- 7 品田（1999a, b, 2001, 2003, 2007, 2011, 2012, 2013, 2018）。
- 8 品田（1999c, 2019）では，同図を用いて油井分布について考察した。
- 9 西山町誌編纂委員会（1963）661-669頁参照。
- 10 高町油田の開発については，品田（2013）を参照。